

---

# 脱毛ジェルの恐怖

ぬじゅわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

脱毛ジェルの恐怖

### 【Zマーク】

Z6780Z

### 【作者名】

ぬじゅわきし

### 【あらすじ】

塗ると毛穴がいっせいに広がる恐怖のジェルにまつわる鳥肌必至のホラー！！！！！あなたは耐えられるか！？

毛野 深男は一つのコンプレックスを抱えていた。毛深い事である。彼は自分の毛深さが嫌であった。彼にとつて理想は、毛のないつるんつるんの人。だから毛が嫌でたまらなかつた。

そんな彼は、ある日、街中で「毛でお悩みですか?」と声をかけられた。振り向くと、幕末製薬という会社の販売員であった。毛野が「ああ…まあ」と答えると販売員は毛野に言った。

「そんなあなたにお奨めの新商品があります!」

販売員は青いチューブを取り出して見せた。毛野は訊ねた。「これは…」

「脱毛ジェル!塗るだけで毛が抜けます!」

「本当ですか?」

「嘘だと言つなら試してみますよ。」

販売員はチューブの入り口に綿棒を入れて、言つた。

「どこの毛を抜いて欲しいですか?」

「どこでも…」

「ではパンツスースを捲つて下さい。」

言われるままに毛野は捲つた。販売員は綿棒でジェルを膝に塗つた。しばらく経つて、あら不思議、塗つた部位の毛がするする抜けたのである。

「すごい!どうやってそななるんですか?」

「薬用成分が毛根に面する毛穴を少し緩める作用があつて、それで毛が抜けるんです。安全性は証明されていて、毛穴が緩むだけで、それ以外の作用はありません。」

「買います!」

毛野は叫んだ。これはすばらしい…と飛び付いたのである。

自宅に帰った後、毛野は早速試してみた。チューインガムを手につけて、腿や膝に刷り込んだ。毛野はつるんつるんな自分を夢見ながら、脚をじっと見つめた。

すると、しばらくしてぽろぽろと毛が落ちた。やつたあ…と毛野は狂喜乱舞した。毛がもうとも過ぎ去った。これからはつるんつるんの自分として新たな一步を歩むのだ…彼は脚だけでなく、髭の生える顔や、胸、腕まで全て塗つた。明日になればつるんつるん…そう夢見て彼は眠つた。

だが、悪夢はそれから始まつた。

翌日、休日でゆっくり起きた毛野は、パジャマを捲つて自分の足を見た。相変わらずつるんつるんである。やつた、と毛野は優越感に浸つていた。鏡をみれば髭も胸毛も腕毛もない。やつた！

だがふと、ふつ、と言ひ音と共に右腿に痛みを感じた事に気づいた。見ると1～2ミリほど小さな穴が一つ空いている。毛野は気になつてなんだこれは、と穴に触れた。

そのとたん、ふふふふふ、とびつしつと右腿全体に穴開き始めた。

「わあ！」

と驚く間もなく、ほん、と両腿から両膝まで全てびつしり1～2ミリの穴が空いた。それを見て毛野の背筋に虫酸が走り悲鳴をあげたが、穴は開いたまま。どうしてだ…しかし、手が痒い…毛野は手を平に返した。

手には沢山穴が空いていた

毛野は悲鳴を上げた。また、ふふふふと何かが穴空く音が聞こえたので鏡を見た。鏡には、腕と胸、そして顔が髭の形に穴が空いていた。

ジェルのせいだ。そう確信して、早速毛野は痒い手の平を我慢してパソコンで、ジェルの主成分のコナドロイチンを調べた。その結果以下の事実が判明した。

コナドロイチンは、毛穴を緩める作用があるが、体质によつては成分の効用が長続きし、緩めすぎて皮膚の強度が下がる事があるのだ。その結果、少しの刺激でコナドロイチンを吸収した肌が緩まりに屈せられず、毛穴全てが可視できるほどに猛烈に拡がるのである。

毛野はジェルを洗面台からごみ箱に投げ捨てた。一度と見たくないし、歯みがき粉と間違えて使用したらどんな事になるか。きっと口腔内が中途半端なアスファルトみたいに穴だらけになるに違いない。

それから数日・脱毛ジェルには脱毛効果がないという信じられない事実が判明した。と言うのも、一端抜がつた毛穴に皮膚が慣れると、こんどは、その穴から毛が生えてしまうのだ。つまり開いた穴から、穴より細い毛が花のおしげのごとくぴんと生え、それが肌全体にびっしりと並んでいるのである。その光景は、あらゆる人も瞬間に黙らせるほど凄まじいものであった。

毛野は慌てて電動かみそりで剃つたが、穴と毛の根元の落差があるため、中途半端に切れた毛が穴の中をぶらぶら漂っているだけむしろ気色悪い事この上ない。

そこでピンセットで抜こうとするが、穴の奥で激痛がするため、い

つも抜けない。

毛野は腹が立つてその売った幕末製薬とやらでクレームを言おうとして、ごみ箱からジホールのチューブを取りだし電話番号を探した。だが、書かれていなし。そこで再びインターネットで調べたが、なんと倒産しており、クレームを言ったところでなにもならない。そもそもこの症状に対応できる力が会社にあるだろうか。

そこで毛野は医者に片っ端から訪れた。だが毛野のおぞましい穴だらけの姿を見ると、医者達は次々と、前例がない、治療できない、他をあたってくれ、と断つた。

そしてよしやく、吉外といいういかにもキチガイな医者に会つた。目が常にビッチつかずで大丈夫かなと毛野は思つたが、吉外は言つた。「ナードロイチンでこうなつたんじゃな。じゃあ、逆の作用をもつアプリコピオンを塗りや。」

「なんですか、それ。」

「毛穴の奥を急成長させ隆起させる薬。これで毛穴を埋めるんじや。」

「

さつそく、毛野は家に帰るとそのアプリコピオンとやらを毛野は脚から腕、胸、顔まで塗つた。これでなんとかなるだろうか…

しばらくして効果が現れた。毛穴が次々と埋まつたのだ。毛野は歓喜の叫びを上げた。もつとも、毛穴の1ミリの大きさは変わらないので、いぼみたいになつたが、穴よりはましである。毛野は深呼吸し、安心した。

だが異常はそれから起きた。毛穴の隆起が止まらないのだ。毛野は焦つた。どうなるのだ…やがて先に毛の生えた触手のようなものが、

全身の毛穴からびっしりとにゅるにゅると生えてきた。それはとどまる所を知らない。触手はふるふるぞわぞわと毛野の意思に反して動き、床にどんどん広がる。彼は悲鳴を上げた。

「それはおそらく、ヤブ医者だったんですね。御可哀想に。」  
まともな病院の相田医師は言った。

「コナドロイチンとアブリコピオンは触れ合つと有毒物質に変異します。それで腫れ上がり、そのような姿になったのです。」

赤肌色の触手だらけの毛野は頷いた。

「まあでも、検査した所では頭以外は皮膚交換のみで大丈夫ですね。」

「頭以外？」

その言葉に毛野は急いで聞いた。

「頭以外です。残念ながらあなたの頭はその有毒物質にかなり犯されてかなり危険な状況にあります。このままだと、はつきり言いますが、死にます。ですから切除するしかありません。」

「切除！？頭を…ですか？」

「ご安心下さい。今は昔より医学も科学も発達している。あなたの脳は首の下に移植され、小型カメラやスピーカーやマイクが胴体に設置されます。日常生活にはほぼ支障はありません。」

「そうですか…」

かくして、首を切り落とされ、首となってしまった毛野。だが意外と切り落としてみると楽なものである。おまけに毛のない人の皮膚を頂

いたし。

回りを見回せば首のない人々をちらほら見る。これから首なし가流  
行きそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6780n/>

---

脱毛ジェルの恐怖

2010年10月10日17時24分発行